



小児用肺炎球菌予防接種説明書



肺炎球菌に感染すると細菌性髄膜炎を発症します。2歳未満の乳幼児は、感染しても抗体（免疫）ができず、繰り返し感染することがあります。5歳未満の乳幼児がかかりやすく、特に生後3か月から2歳になるまではかかりやすいため注意が必要です。その他にも中耳炎、副鼻腔炎、気管支炎、肺炎、敗血症など重篤な全身感染症を引き起こします。最近では抗生物質の効かない菌（耐性菌）も増えており、治療が困難になっています。

小児用肺炎球菌予防接種は、約90種類ある肺炎球菌のうち、20種類または15種類の菌の感染予防に効果があります。

1 対象年齢・接種間隔

確実に免疫をつけるために、特別な接種間隔が定められています。接種前に、必ず確認しましょう！

定期接種で受けられる小児用肺炎球菌ワクチンは、20価（プレベナー20）または15価（バクニュバンス）の2種類あり、接種方法は皮下注射又は筋肉内注射です。

対象年齢：生後2か月以上生後60か月（5歳）未満（標準的接種期間：生後2か月以上生後7か月未満）

※ 接種を開始する年齢によって、接種回数が異なりますので、ご注意ください。

接種開始年齢	接種間隔		接種回数
生後2か月以上 生後7か月未満	初回	生後12か月未満の間に、27日（4週間）以上の間隔をあけて3回接種を受ける（2回目の接種が生後12か月を超える場合は、3回目の接種は受けない。また、2回目の接種が生後24か月を超える場合は、2、3回目の接種を受けない。ただし、いずれも下記の追加接種は可能）。	3回
	追加	初回接種終了後、60日以上の間隔をあけて、生後12か月以降に1回接種を受ける。	1回
生後7か月以上 生後12か月未満	初回	生後13か月未満の間に、27日（4週間）以上の間隔をあけて2回接種を受ける（2回目の接種が生後24か月を超える場合は2回目の接種を受けない。ただし、下記の追加接種は可能）。	2回
	追加	初回接種終了後、60日以上の間隔をあけて、生後12か月以降に1回接種を受ける。	1回
生後12か月以上 生後24か月未満	60日以上の間隔をあけて2回接種を受ける。		2回
生後24か月以上 生後60か月未満			1回

2 接種後の経過と副反応

接種後の過ごし方について詳しくは裏面をご覧ください。主な副反応は、接種部位が赤み、腫れ、しこりなどの局所的な反応です。また、発熱、不機嫌などの全身反応がみられることがありますが、いずれも一時的なもので、数日程度で治ります。まれに重い副反応として、ショック・アナフィラキシー様症状（じんましん、呼吸困難など）、けいれん（熱性けいれんを含む）、血小板減少性紫斑病が認められています。

3 予防接種健康被害救済制度について

万が一、小児用肺炎球菌予防接種による重篤な健康被害が発生し、被害者からの健康被害救済に関する請求について、厚生労働省が因果関係を認定した場合、国の定める医療費、医療手当、年金等の給付を受けることができます。

- ☐ 前回の**小児用肺炎球菌予防接種からの間隔**、他の予防接種からの間隔は、両方とも大丈夫かな？
- ☐ 下痢はしていないかな？☐ 熱は？
- ☐ ひどい湿疹はないかな？☐ せきや鼻みずは？
- ☐ いつもと違うところはないかな？☐ 機嫌は良いかな？

◎ 予防接種に関するお問い合わせは・・・



裏面はお読みになりましたか？
不明な点は接種前に医師に
ご確認、ご相談ください。



予防接種を受ける前にお読みください



予防接種は、感染症にかかることを防いだり、かかった時の症状を軽減したり、病気がまん延することを防ぐために行なわれます。

赤ちゃんがおなかの中にいる間におかあさんからもらった免疫力（病気から体を守る力）は、生後数か月から1年くらいで自然に失われていきます。そのため、その後は子ども自身で免疫をつくって病気を予防する必要があります。その助けとなるのが予防接種です。

予防接種を受ける前には、予防接種の特徴や有効性、副反応などをきちんと理解することが大切です。予防接種を記入する前に、この説明書をお読みの上、不明な点などは接種前に医師に相談しましょう。

☆ 予防接種のきほん ☆

1. 予防接種を受けることができないのはどんなとき？

予防接種は、体調の良いときに受けるのが原則です。下記のいずれかにあてはまる場合は接種できません。

- 1) 明らかに熱がある（一般的には37.5℃以上）
- 2) ひどい下痢をしている
- 3) 重い急性の病気にかかっている
- 4) その日に受けるワクチン、またはワクチンに含まれている成分でアナフィラキシーショックを起こしたことがある（アナフィラキシーショックとは接種後30分以内に蕁麻疹などの皮膚症状や、腹痛や嘔吐などの消化器症状、そして息苦しさなどの呼吸器症状を呈します。）
- 5) ロタウイルス接種の場合、腸重積症にかかったことがある。
- 6) ロタウイルス接種の場合、腸重積症の発症を高める可能性のある先天性の消化管障害があり、治療していない。
- 7) ロタウイルス接種の場合、重症複合型免疫不全（SCID）を有する
- 8) BCG接種の場合、予防接種や外傷などによるケロイドが認められる
- 9) BCG接種の場合、結核にかかったことがある
- 10) 水痘予防接種の場合、水痘にかかったことがある。
- 11) 麻しん（はしか）、風しん、おたふくかぜ、水痘（みずぼうそう）、などの感染症にかかり治ってから4週間以上経っていない場合や突発性発疹、手足口病などにかかり治ってから2週間以上経っていない場合
- 12) 子宮頸がん予防接種対象者の女性で、妊娠している又はその可能性がある場合
- 13) その他、医師の判断で不適当と判断された場合

2. 予防接種の間隔について

予防接種を受けてから次の予防接種を受けるまでに一定の期間が必要になります。接種したワクチンの種類によってその間隔が異なりますのでご注意ください。

1) 異なる種類のワクチンを接種する場合

注射生ワクチンを接種した場合・・・

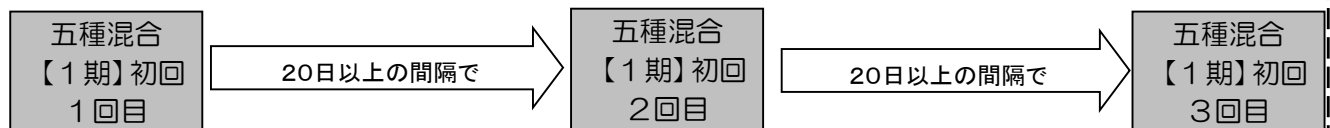
（BCG、水痘、麻しん風しん混合など）

4週間以上あけてから

注射生ワクチン

2) 同じワクチンを複数回接種する場合

＜例＞五種混合ワクチン

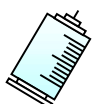


※ B型肝炎、小児用肺炎球菌、五種混合、水痘、日本脳炎などは同じ種類のワクチンを複数回接種します。確実な免疫をつけるために、決められた接種間隔で受けましょう。

3. 予防接種後の過ごし方

接種後に副反応がでることがありますので、下記の点に気をつけましょう。

- 1) 接種後30分くらいは接種した医療機関で子どもの様子を観察するか、かかりつけの医師とすぐに連絡がとれるようにしておきましょう。急な副反応はこの間に起こることがあります。
- 2) 接種した日は、普段どおりの生活でかまいません。ただし、はげしい運動は避けましょう。
- 3) 接種した日の入浴はかまいませんが、接種部位を強くこするのは避けましょう。
- 4) 生ワクチン（BCG、水痘、麻しん風しん混合など）は接種後4週間、不活化ワクチン（B型肝炎、小児用肺炎球菌、五種混合、二種混合、日本脳炎など）は接種後1週間、副反応の出現に注意しましょう。
- 5) 予防接種後に接種部位のひどい腫れ、高熱や麻痺などの重篤な症状が現れた場合、医師の診察を受けた後に保健所保健予防課（Tel 626-1114）までご連絡ください。



本日受ける予防接種の特徴や副反応などは、表面に記載されています。
接種を受ける前に必ずお読みください。

